

## 教科教育を体験的な学びにするには

—サイエンスハンズオンプログラム GEMSの体験を素材に—

ふりがな たかぎみきお・しばはらみどり・おかあきこ・たけいしいずみ  
氏名 高木幹夫・柴原みどり・岡亜希子・武石泉  
(所属) 日能研・ジャパンGEMSセンター

キーワード：科学教育・教科学習・総合的な学び・持続可能学力

### 【 報告の要旨 】

実習の概要：科学教育において、「実験」という言葉は当たり前に使われているが、その多くは追試実験であり、実際に学校の中で「実験」が探求を伴う「体験」として学びにつながるには、(意図的に取り組まれている学校現場や、先生を除いては) ほど遠い現状がある。その結果、科学を学ぶことが、知識を覚えることであったり、あてはめて問題を解くことにだったりになってしまっている。科目を超えた「総合的な学習の時間」が有効なものとして機能せず、縮小されたことも「実験」や「体験」から学ぶ機会を減らし、知識偏重の教科教育が味気なさを生むことに繋がっているのであるとすれば、残念なことである。

#### ◇探求型科学教育プログラム GEMSについて

GEMS (Great Explorations in Math and Science)は、アメリカのカリフォルニア大学ローレンスホールオブサイエンス (Lawrence Hall of Science)において1980年代から研究されている子どもを対象とした科学と数学の参加体験型プログラムである。体験学習の理論に基づいてプログラムが構成されており、子どもたちの自由な想像力を引き出しながら科学の基本概念や方法を学ぶことを大切にしている。また、結果(知識)のみでなく、プロセスを重視し、子どもたちが自分たちで実験を企画し、話し合って結論を導き出していく過程が実験の中に含まれていることも大きな特徴である。

#### ◇ラーニングサイクル・体験学習サイクルと教科学習

ラボラトリー方式の体験学習法他、いわゆる体験型と呼ばれる学びにおいて重要とされる循環サイクル (Experience : 体験する→Identify : 見る→Analyze : 考える→Hypothesize : わかる) や、GEMSプログラムにおけるラーニングサイクル (Invitation : 導入→ Exploration : 探求→Concept Introduction : 概念の導入→Application : 応用) の存在は、学習者が主体となって学びを進めていくために重要な要素となる。これらの考え方を一つの材料にして、既存のアクティビティやプログラムだけでなく、通常の教室で行われる教科教育に繋いでいくために何ができるかという可能性について考えると同時に、「体験型の学び」を必ずしもこれらのサイクルに限定されず、学習者主体の生き生きとした学びの場を作るために、ファシリテーターや指導者、教員等、関わる人ができることについて討論し、可能性を広げていきたい。

## 〈プログラムの流れ〉

### I、「科学的とは？」

(アイスブレイクを兼ねたグループでのディスカッション)

### II、GEMSプログラム 体験

- ① 「科学の目でふるいにかける」よりアクティビティの体験
- ② ふり返り
- ③ わかちあい

### III、GEMSプログラムに関する補足説明

### IV、質疑・討論

#### ◇ファシリテーターの動きや学習者への関わり方：

- 1) ブリーフィングとディブリーフィング（KP法の活用を含めた情報提供など）
- 2) 学習者がどれだけ細かく体験学習サイクルを回せるかに関する場づくり

#### ◇これまでの実施における参加者の気づき・学び・反応：

小学校5・6年生を対象に連続してGEMSプログラムを実施した後、科学的思考力の変化について調査を行ったところ、思考力を積極的に使用する傾向について有意な上昇が見られたという報告が得られている。(日本教育心理学会 2013 鴨川による報告)

## 【 討論のポイント 】

- ・全ての教科教育を体験的学びにするために、どのような種をまいていけば良いか
  - 「体験的な学び」を構成するものは？
  - 学習者の主体性を作るために、ファシリテーター（指導者・教員等）のできることは何か？
  - 「体験的な学び」を促進していくために、効果的な「場づくり」にはどのような工夫ができるか？
- …等々の視点は考えているが、当日集まれた皆さんがGEMSのプログラム体験を素材に、感じたことや、日々考えておられることを話しながら、体験教育と教科教育を繋ぐヒントをつかむ場にできればと考える。

## 参考文献他

- ・津村俊充・山口真人編「人間関係トレーニング」第2版（ナカニシヤ出版）
- ・津村俊充著「プロセス・エデュケーション」（金子書房）
- ・川嶋直著「KP法」（みくに出版）
- ・ジャパンGEMSセンターHP：<http://japangems.org/>

## 協力すれば、クラスが変わる

— “知り合う” から始めよう —

かんだとしゆき くにたけめぐみ  
神田 敏之・國武 恵

(日本学校グループワーク・トレーニング研究会)

キーワード： “知り合う” というカテゴリー、自己理解、他者理解

### 【 報告の要旨 】

「学校グループワーク・トレーニング」は、文字通り、「グループワーク(集団行動・活動)のトレーニング(練習)」です。授業時間内に行えるよう、グループワーク財(実習)をつくっていますが、子どもたちがそのことをうまく取り組めるようになることが目的ではありません。GWT を実施する場合、体験からの気づきを日常につなげられるよう、個々のふりかえり、全体でのわかちあいやまとめを工夫しますし、大切にしています。この、GWT での気づきの「日常化」に向かって、子どもたちの実態に合わせて、ねらいやふりかえりを吟味したり、財のカテゴリーを選んだり、意図的・計画的に実施します。しかし、最終的に授業や休み時間や掃除といった日常に生かすのは、子ども自身が自ら行動変容していくかどうかに委ねられているのです。

今回のテーマは、「“知り合う” ことから始めよう」、です。

最近の子どもたちは、「自分のこと」を相手に伝える経験が少ないのでは…と感じます。「自己紹介をしよう」と投げかけられても何をどう紹介していいかわからない子、自分自身のことがよくわからない子を見かけます。もしくは、友達に何と言って話しかけたらよいかかわからず、子ども自身、自分の友達関係を広げたり深めたりしようとせず、新学期からそのまま夏休みになってしまうこともあるのではないのでしょうか。

そんな最近の子どもたちの実態から見えてくる課題を、子どもたち自身が気づき行動変容できる財をつくらう！と取り組み、第4巻では、新しく「互いを知り合う GWT」というカテゴリーをつくりました。子どもどうしが関わりをつくるきっかけになる財になればと考えています。

「互いを知り合う GWT」では、「今、ここ」に焦点を当てます。そうして、

- ・「わたしと同じ」「ぼくと一緒だ！」という共感
- ・「へえ、そうなのか」「え？どうだったの?」「すごいなあ」という発見
- ・「やっぱりそうかあ」「そうだと思ってたんだ…」という納得

というような気づきを子どもたちが体験することを意識しながら、財を実施することをお勧めします。

参加者の方には、いくつかの「互いを知り合う GWT」財の体験をしていただき、上記の気づきが自分な中で起こったか、そうしてその気づきと一緒に体験するメンバーとの心的距離感にどんな影響を及ぼしたか、互いを知り合い、関係を進めて行くきっかけになりうるかどうか、意見交換したいと考えています。また、心的距離感が縮まる他の要因があったとしたら、ぜひ、お聞きし、「互いを知り合う GWT」というカテゴリーを豊かなものにしていきたいと考えています。

## ※実習の概要

「知り合う」に焦点を当てた財（実習）

## ※ファシリテーターの動きや学習者への関わり方

大まかなプログラムの内容

- ・学校 GWT の紹介
- ・学校 GWT の財体験
- ・「互いの関係づくり」に関して、現場で感じる課題と解決に向けての援助促進とはどのようなものか、についての討議

## ※これまでの実施における参加者の気づき・学び・反応

財（実習）体験を通して、どのようなプロセス（気持ち、感情、思考など）が自分の内側で起こっていたかに目を向け、気づく。その気づきをわかちあうことから、より相手と知り合いたいと思う（関係づくりの）きっかけとなったものとは何か、について気づく。

### 【 討論のポイント 】

この分科会に参加された方々が、それぞれの現場や場面でどのような“知り合う”きっかけづくりをされているのでしょうか？

より豊かな関係性を育むために、わたしたち（体験学習に携わる同志として）にできることはあるのでしょうか？あるとしたら、どのような可能性があるのでしょうか？

今だから感じる、関係づくりを進めるにあたっての課題とその課題解決について意見をきき合いたいと思っています。

### 日本学校グループワーク・トレーニング（GWT）研究会について

日本学校 GWT 研究会は、日本に初めて GWT を紹介した故・坂野公信氏と出会い、発足しました。わたしたちは、子どもたちのよりよい人間関係づくりをめざして、成人を対象として開発され活用されてきた GWT の有効性を認め、これを学校教育に取り入れようと考え、児童生徒の発達段階に応じた、学校一単位時間内で行うことのできる、学校 GWT の研究開発を独自に進めています。

この会が発足して 26 年になります。学校 GWT をクラスに取り入れ、「学級が変わった」「グループの動きが見えるようになった」「子どもの見方が変わった」などの声が聞かれます。また、1987 年に初めての本を出してから、「学校 GWT 体験をしてみたい」という声も多く聞かれるようになりました。そのため、新しい学校 GWT 財の開発を行う一方で、講習会を主催しています。また、様々な研究会の研修、教育委員会主催の子ども向けの会や教職員対象の研修、各市ジュニアリーダー養成講習会の講師などの活動もしています。

### 参考文献

- ・横浜市学校 GWT 研究会『学校グループワーク・トレーニング』遊戯社 1989
- ・日本学校 GWT 研究会『協力すれば何かが変わる一続・学校グループワーク・トレーニング』遊戯社 1994
- ・日本学校 GWT 研究会『学校グループワーク・トレーニング 3－友だちっていいな 自分っていいな』遊戯社 2003
- ・日本学校 GWT 研究会『学校グループワーク・トレーニング 4－もっと知りたいな、あなたのこと、わたしのこと』遊戯社 近日発売！！

## リスニング・ミュージック・プログラム

ポップス音楽の歌詞を用いた体験学習 - 環境教育や野外教育、学校教育への可能性

ながの よしはる  
長野 義春

(越前市エコビレッジ交流センター)

キーワード：エコサイコロジー、倫理教育、道徳教育、内観、学習者主体

### 【 報告の要旨 】

筆者は 2009 年より、主にエコサイコロジーとしての環境教育や野外教育において、日本のポップス音楽の歌詞を用い、その歌詞の意味を考え、意見交換する体験学習を試行してきました。このアクティビティ（エクササイズ）は、発展途上にあると考えており、学校での倫理教育や道徳教育など他分野への応用が期待できると考えています。今回は、このアクティビティを紹介し、環境教育や野外教育以外の分野への応用や発展の可能性について探りたいと考えています。

※実習の概要および背景

筆者の専門は環境教育および野外教育です。講座や研修などで、世界や日本の環境悪化の状況を伝えると、未来に不安を感じ、無力感に陥る人や投げ遣りになる人もいます。また、知識が増えるが動こうとせず、傍観者になってしまう人もいます。別のケースとしては、環境保全活動に熱心なあまり、問題解決や目標に向けて物事がうまくいかなくなると、うまくいかない要因を自分自身に求めず、他者に求める「外観」になってしまう人もいます。エスカレートすると、他者批判の方が強くなる人も希に現れます。環境問題の解決に向けた、意欲や前向きな意識、希望を持ち続け、協調や連携した活動を進めるためには、知的理解だけで無く、「感情」「気持ち」といった「内観」「自己の内側」にも目を向けるなど、エコサイコロジーも重要と考えます。

林間学校など野外教育においては、音楽や歌唱を取り入れた活動があります。例えば開会式で校歌を歌う、登山中や活動中に歌う、キャンプファイヤーや夜間のプログラムにおいても音楽を取り入れ、合唱する活動が見られます。しかし、その曲の歌詞の意味について深く考える時間は与えられていない例が多いようです。また、野外教育においても、物事がうまくいかなくなると「外観」になってしまう学習者や活動の意義が理解できず無気力になる学習者も現れます。筆者は、主に環境教育や野外教育において、ポップス音楽の歌詞を用い、その歌詞の意味を考え、意見交換し、「自己の内側」に目を向ける体験学習を試行してきました。このアクティビティ（エクササイズ）は、CD デッキなどがあれば、室内でも野外においても手軽に実施できます。

具体的には、ファシリテーターが事前に、目的や対象者に合わせた楽曲を数曲選出し、曲順を決定しておきます。CD デッキなどの放送機器と CD または楽曲をダウンロードした iPodなどを準備します。歌詞を記した配布資料も準備し、配布するとより効果的です。資料を用いない場合は、同じ曲を 2 回以上繰り返し再生する方法もあります。

実施時間は、1~2 時間程度、2~6 曲程度が適当と考えます。複数の学習者（体験者）を 1ヶ所に集め、全員で、音楽を聞き、歌詞の内容に注目します。その後、歌詞から読み取れる情報、感じた気持ち、類似する体験談、倫理的な気づきなどを述べ合います。このアクティビティは、学習者の「内観」「自己の内側」に目を向け、発言し、意見交換し、自身が知らない自分に気づき、



「盲点」を探ることが目的です。

※ファシリテーターの動きや学習者への関わり方

このアクティビティ（エクササイズ）は、構成型ではありますが、限りなく非構成型に近いアクティビティです。特に1曲目の後は、なかなか発言がなされません。ファシリテーターは、沈黙の時間を恐れず、待つ姿勢が大切です。沈黙の時間も想定して時間配分します。楽曲の選曲は「人を思いやる気持ちを表現した歌詞」「課題解決に向けて前向きになれる歌詞」、「問題点を取り上げ問いかける歌詞」などが相応しいと考えます。私の場合は、主に、10歳代～20歳代の若者の心境を表現したポップス音楽の楽曲を採用しています。これは、私が対象にする学習者・体験者の多くが、10歳～20歳代であるからです。また、よく知られているヒット曲は採用せず、殆どの学習者・体験者がおそらく初めて聞くとと思われる楽曲を採用するように心がけています。

使用上注意すべき点もあります。選曲を行う上で、曲調、曲順に配慮する必要があります。最初は発言しやすい歌詞と曲調を選ぶことをお勧めします。最初の楽曲は重要で、学習者は何を発言すべきか、試されているような恐怖もあり、周囲に気を使いながら恐々意見します。最初に心境が重くなる歌詞を取り上げると「自己開示」が困難になる場合があります。対象年齢も12歳程度以上と考えています。それ未満の年齢の場合、言葉による表現が苦手、あるいは過去の類似体験の少なさから、歌詞を読んでもその意味が理解できない学習者が増えます。このアクティビティは、全くの初対面のファシリテーターと学習者の間で実施することも可能ですが、初対面から数時間程度、軽いコミュニケーションを経てから実施するとスムーズです。また、音楽には、著作権があり、使用料を支払わないで使用する場合は、教育活動として、許される範囲内に留めてください。使用料が発生する場合は速やかにお支払ください。（日本音楽著作権協会 HP 参照）

※これまでの実施における学習者の気づき・学び・反応

歌詞に注目し、歌詞から得られる情報を読み取ろうとする作業は、過去の体験や発言を思い出させる効果があるようで、内観の促進に役立っていると考えます。特にポップス音楽は、日本で最も聴かれている楽曲であり、特に10歳～20歳代の若者にとっては、童謡やクラシックよりも身近で、楽しく、聴くことができます。また、学習者・体験者が楽曲を気に入り、講座の合間に流して欲しいと申し出る。講座終了後、曲を聞くたびに講座のことを思い出すと感想もよせられました。人との出会いで人が内側から変わることがあるのと同じように、歌詞・楽曲との出会いが人を変える切欠になる可能性も秘めているようです。

## 【 討論のポイント 】

- ・環境教育や野外教育以外の分野への応用の可能性。特に学校教育において。
- ・本アクティビティ（エクササイズ）と他のエクササイズとの組み合わせなど、さらなる発展、応用について。

## 参考文献

- ・市川智史（1994）国際環境教育計画（IEEP）の第1期における環境教育の目的論に関する一考察. 科学教育研究 18(4), 197-204
- ・川浦佐知子（2000）「地球・自然・人とともに生きる」試論としてのエコサイコロジー. 人間関係 (17), 26-40
- ・松井琴世ら（2003）音楽刺激による生体反応に関する生理・心理学的研究. 臨床教育心理学研究 29(1), 43-57
- ・森 数馬（2010）日常の音楽聴取における歌詞の役割についての研究. 対人社会心理学研究 (10), 131-137
- ・神崎宣次（2011）道徳心理学の三つの話題：環境倫理学のための道徳心理学. 実践哲学研究 33, 127-154

## いじめ防止のためのピア・メディエーション

やまぐち けんじ

山口 権治

(静岡県立浜松江之島高等学校)

キーワード：課題解決、ケアリング・マジョリティー、いじめ予防

### 【 報告の要旨 】

「ピア・メディエーション」という言葉の単語ごとの意味を見ると、ピアは「仲間」、メディエーションは「調停」です。つまりピア・メディエーションとは、生徒同士がいじめやもめごとの渦中にある当事者の話を聞きながら、繰り返し・要約のスキルを使い、当事者それぞれの気持ちを受け止め、話を進展させ、共通点を見いだして、合意を形成することを指します。

ある調査(\*1)では、高校生 4122 名に「暇な時に何をしていますか？」という質問をしたところ、直接人に会わずに済む事柄を回答した生徒が、実に全体の約 75% に上りました。では、彼らはなぜ、直接会ってのコミュニケーションを敬遠するのでしょうか。それは、そのようなコミュニケーションによる感情交流の中で、自らが傷つくことを恐れているのではないかと、私は考えます。その結果、感情表現を言語化することが不得意になってしまっていると推測されます。一般にいじめは、イライラした感情の代償行動だと言われています。これらから、近年の生徒たちは、感情の中でも特にネガティブな感情を言葉で表せないために、行動化、つまりいじめ加害を起しやすくなっているのだらうと、私は考えています。実際、文部科学省の資料(\*2)によると、校内暴力事案の発生件数は 2005 年と 2010 年との比較で、2010 年の方が約 77% も増加しています。感情を言語化できない結果、キレやすい生徒が増えているのです。また、いじめが発生したクラスにおける、生徒の被害者・加害者・傍観者の構成比率を見ると、傍観者が実に約 85% に上ります(\*3)。この大多数を占める傍観者(サイレント・マジョリティー)を、思いやりのある仲裁者(ケアリング・マジョリティー)に変質させることができれば、いじめ発生に対する強力な抑止力になるものと期待しています。そこで、生徒に話し合い(言語)によって課題を解決する方法を教えることで、対立を収め、いじめを防ごうとする試みを行いました。

---

\*1 『『暇な時、何をしていますか?』～余暇の過ごし方から見た、現代の若者考～』

ripre ～2012 Autumn Vol.2～ 株式会社エスエスケイ 2012

\*2 平成 23 年度 文部科学白書

\*3 Bonds and Stoker 「Bully Proofing Your School」 Sopris West 2000

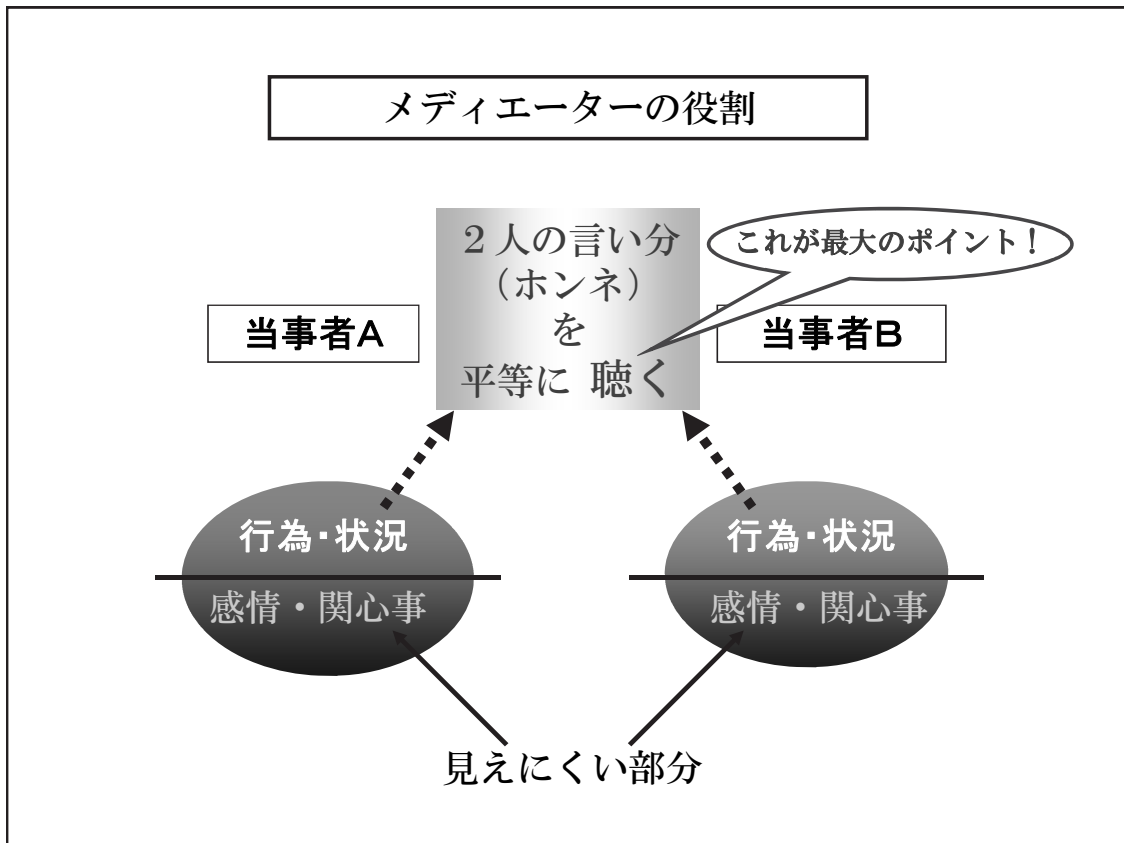
### ※ファシリテーターの動きや学習者への関わり方

- ・参加者が安心してプログラムに参加できるよう、雰囲気づくりを心がける。
- ・参加者がスムーズに活動できるように、インストラクションを明確にする。

※プログラムの流れ

- ①アイスブレイク
- ②本活動のねらいの説明
- ③オウム返し
- ④要約
- ⑤ロールプレイ
- ⑥振り返り

メディエーションのポイント



日本ピア・サポート学会 「トレーナー養成標準プログラム  
テキストブック Ver.2」(2011)より (一部改変)

※これまでの実施における参加者の気づき・学び・反応

- ・メディエーションという方法があることを知り、その有効性に気づく。
- ・このスキルを使うことにより、対立やもめごとに早期に介入できれば、いじめの深刻化を予防できることに気づく。

【 討論のポイント 】

- ・このプログラムの有効性を高めるために、方策・改善点があるか。
- ・教師がメディエーションの有効性に気づき、学校現場で実践するためにはどうしたらよいか

参考文献 (脚注以外)

- ・森田洋司・清永賢二 「いじめ —教室の病い—」 金子書房 1986



# 事実・推測・判断のワーク & チーム力を磨くワーク

## — 獣医療コミュニケーションへの扉 —

ほりきた てつや  
堀北 哲也

(NDK：農場どないすんねん研究会)

キーワード：獣医療、EBM、インフォームドコンセント

### 【 報告の要旨 】

1. 診察室での誤解や手術室でのバタバタを防ぐコミュニケーショントレーニング  
今回提示する実習は二つのワークで構成されています。一つは「事実・推測・判断について考えるワーク」で、いま一つは「チーム力を磨くワーク」です。  
前者は、2011年の日体研全国大会でグループファシリテーターの会 Seeds が発表した実習「3色ペン」<sup>1)</sup>に参加したことに端を発しています。言葉には内容とレベルがあり、レベルには、事実、推論、断定の三つがあります。この三つのレベルは獣医療の現場でインフォームドコンセントを念頭に獣医師と飼い主との間で交わされる会話においても重要なことです。そこで、「3色ペン」を獣医療向けのワークに改変し、獣医師や学生を対象とした講習会や授業で実施しました。後者は、オリジナルのワークで、チーム力を養うことをねらいとしています。授業や講習会で資料を配布するときに実施するワークで、チームビルディングに役立つことをねらいとしています。  
このエクササイズ・セッションは、獣医師の方にも、獣医師に動物を見てもらうことがある方にも、そんなこと全く関係ない方にも楽しく学んで頂ける場にしたいと思っています。
2. 実習の概要
  - 1) 事実・推測・判断について考えるワーク  
このワークのねらいは「話の三つのレベルを理解し、会話における三つのレベルの重要性を認識すること」です。実習の手順は以下の通りです。
    - ①小講義
    - ②事実・推測・判断について例文をもとに考える
    - ③ふりかえりとわかちあい小講義では、表1について説明します。その後、事例を挙げそれが事実・推測・判断のどれに該当するかを各自で考えます。次にペアで話し合い、答え合わせをしたのちにグループでふりかえり、全員でわかちあいます。
  - 2) チーム力を磨くワーク  
このワークのねらいは「チーム力に必要なスキルを認識すること」です。進め方は、上記のワークの中で資料を配布する時が来たら、以下の手順で実施します。
    - ①全員起立します。
    - ②教壇にある資料を手にした人から着席し全員が着席するまでの時間を測ることを伝え、よーいどん！で始め、全員が着席する時間を測ります。
    - ③資料を配るたびに繰り返します。途中、作戦タイムをとることもあります。
    - ④終了後、ふりかえりとわかちあいを行います。
  - 3) ファシリテーターの動きや学習者への関わり方  
二つのワークが混在している実習のため、参加者が戸惑わないように注意しながら実施します。

## 4) これまでの実施における参加者の気づき・学び・反応

前者のワークについては、5か所のべ200名を対象に実施しました。参加者からは「レベルを共有することでミスマッチが減らせることに納得した」「飼い主や仕事仲間との間でレベルが共有できていないと感じた」「相手を前にしながらレベルを意識するのは難しいと感じた」などのコメントがありました。また推測と判断の区別が不明瞭との指摘がありました。後者のワークについては、「自分の役割を理解することで円滑な社会にできる」「チームでのコミュニケーションの大切さに気付いた」「少し頭が混乱した」などの意見がありました。

## 【 討論のポイント 】

1. 二つのワークはそれぞれ、ねらいと内容が一致していたか。
2. 進め方に不明瞭な点、わかりにくい点はなかったか。

表1 言葉のレベルの比較

|   |   |  |   |
|---|---|--|---|
| S.I.<br>HAYAKAWA  | 報告(reports)   | 推論(inferences)   | 断定(judgments)   |
|   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・事実</li> <li>・直接の経験</li> <li>・実証可能または反証可能</li> <li>・報告の報告は、報告である</li> <li>・推論や断定の報告は、報告ではない</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・知られていることを基礎に知られていないことについてなされる叙述。</li> <li>・直接知られないことについて観察されたことの基礎の上になされる叙述。</li> </ul>      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の賛成、不賛成を表明すること</li> </ul>                       |
| ステレオタイプや早すぎる断定は、目の前にあることを我々に見えなくすることが多い。断定は、思考を止める。                                       |   |  |   |
| 星野欣生  | 事実  | 推論   | 断定  |
|   | 報告  | 意見   | 評価・判断   |
|   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・起こっていた事実をそのまま伝えること</li> <li>・伝え手の考え、評価、判断は入らない</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・事実とその周辺で起こっていたことをつなぎ合わせて考えを表明すること</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・推論したことに評価判断を加えること</li> <li>・良い悪いと決めること</li> </ul> |
| 言葉には三つのレベルがある。言葉で伝えるときは、こういう事実があって(報告)、そのことについて私はこう推論し(意見)、だからダメだと思います(断定)、とレベルの段階を追って話す。 |   |  |   |
| 獣医療   | 事実  | 推測   | 判断  |
|   | 事実  | 所見・仮診断・仮説  | 診断  |
|   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・触診、視診、問診などから得た事実</li> <li>・血液検査、レントゲン検査などから得た事実</li> <li>・問診での飼い主からの情報は、報告であること</li> </ul>            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・事実をもとに述べる考え</li> <li>・事実をもとにいくつかの原因疾病をあげる</li> <li>・事実を証拠(evidence)と照合し、原因を推し量ること</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・原因疾病を特定すること</li> </ul>                            |
|   | 飼い主も獣医師も、その言葉がどのレベルにあるかを認識することが重要。言葉を伝えるときは、内容だけでなく、言葉のレベルも共有することが重要。インフォームドコンセントでは、内容だけでなくレベルも正しく伝えることで誤解を防げる。                               |  |   |

## 参考文献

- ・桐林真紀、小出公子、杉山郁子ら（グループファシリテーターの会 Seeds）：実習「3色ペン」オリジナル実習、第13回日本体験学習研究会全国大会要旨集、32-33（2011）。
- ・S.I.HAYAKAWA：思考と行動における言語、第4版、大久保忠利訳、36-54、岩波書店（1985）。
- ・星野欣生：職場の人間関係づくり、46-51、金子書房（2007）。

# 保育士の自己成長とチームビルディングを 目的とした体験学習の試み

ーボディワークと多様なふりかえりを通してー

すずき けんじ  
鈴木 健史

(所属) 南山大学大学院人間文化研究科教育ファシリテーション専攻 大学院生

キーワード：チームビルディング・ボディワーク・保育・ふりかえり・コミュニケーション・対人援助職

## 【 報告の要旨 】

保育所という組織において、保育士の定着と育成が課題となっている。都市部では、待機児童が社会問題化しているが、保育士の勤続年数の短さ（平均就業期間は4年～8年であるという調査がある）などの理由により、保育士が足りないという事態が起っている。

保育士も看護師や教師と同じ対人援助職であり、バーンアウトの研究もなされている。労働条件や体力的な問題、保護者との関係などが保育士のストレスの代表的なものとしてあげられるが、園内の人間関係も大きな要因となっている。研究では、保育士でストレスの低い者は、積極的に自己を変えていこうとする姿勢を持つものが多いということや、管理職や同僚からのサポートがあるということがわかっている。前者を自己成長、後者をコミュニケーションやチームビルディングの問題ととらえると、両者を目的とした研修を実施することで、ストレスを軽減させることができるのではないかと考えた。

そこで方法の一つとして今回提案させていただくのが、ボディワークを研修に取り入れることである。なぜなら、保育士は、乳幼児に対して身体接触を伴う遊びや、身体接触により愛情を示す場面が多いため、普段から自分の姿勢や声の出し方など、からだについて比較的意識されているし、参加意欲も持ちやすいと考えたからである。また、「自己の象徴としてのからだ」を一つの手がかりとして、からだという新たな視点から保育士自身のあり方に気づいていくことができるだろう。さらに、チームでボディワークを体験することで、言葉以外の非言語コミュニケーションの大切さに気づいたり、言葉を越えたチーム内の信頼関係を築くことも期待できる。

そこで本セッションでは、自己成長と人間関係に焦点づけたボディワークと、ねらいを達成するために各種ふりかえり（口頭、ふりかえり用紙記入、描画等）を行い、ボディワークが期待する効果を得られるか検討を行う。ボディワークは、竹内敏晴氏のからだとことばのレッスンを基に、人間関係に焦点づけた動きのあるエクササイズを行う。

## ●実習の概要

### エクササイズのねらい

- ・ボディワークとふりかえりを通して、ペア、またはチームに対する信頼関係を築く
- ・体験を通して、自分の人に対する関係の取り方（構えや緊張）に気づく
- ・気づいたことや学んだことを、日常の対人関係（対大人、対子ども）への生かし方を考える

## エクササイズ・セッションの流れ

- ①イントロダクション・エクササイズのねらい・流れ・参加の約束事の説明
- ②グループ分け
- ③エクササイズの実施
- ④グループでふりかえり
- ⑤休憩
- ⑥意見交換、発表者へのフィードバックと質疑応答（60分）

アクセサリーや腕時計などはなるべく身につけず、しめつけのない動きやすい服装でお越しください（スカートやストレッチ性のないジーンズ等は避けてください）。基本的には裸足、もしくは靴下で行います。エクササイズ中は喉が渇くこともあるので、ペットボトル等飲み物があると良いと思います。

### ●ファシリテーターの動きや学習者への関わり方

エクササイズでは、発表者がファシリテーターとして関わります。エクササイズはいくつか連続して行い、その後にはふりかえりを行います。ファシリテーターはエクササイズからの学びをよりねらいに近づけるために、エクササイズ中に言葉での説明等を行うことがあります。身体接触は無理なく、参加者自身のペースで参加していただけるように配慮いたします。

### ●予想される参加者の気づき・学び・反応

言葉でのふりかえりやわかち合いの時以外は、参加者の方は体験していることを考えるのではなく、感じていただきたいと思っています。普段身にまとっている自分を守る心の鎧や壁は、相手と知り合うことで少しずつ脱いでいきます。しかし、身体にふれるということは、一度に相手と自分の距離がなくなる、距離がゼロになるという体験です。自分でも普段感じていないような安心感だったり暖かさを感じるかもしれませんが、同時に何か落ち着かない感じなどネガティブな感情がわき起こってくるかもしれません。考えるのではなく、その感情をそのまま味わってみるということをしてみてください。体験を通して、今まで気が付かなかった感じ方をする自分に気づくことができるかもしれません。

## 【 討論のポイント 】

- ・ボディワーク実習がチームビルディングやコミュニケーション向上に役立つかどうか
- ・各種ふりかえりがねらいを達成することに効果的かどうか
- ・子どもに添う大人（保育士・教師等）として、学びをどう生かすことができるか
- ・今回の実習の構成やボディワークの活用方法など

## 参考文献

- ・グラバア俊子． 新・ボディワークのすすめ ． 創元社， 2000. 7.
- ・竹内敏晴． ことばが劈かれるとき． 筑摩書房， 1988. 1.
- ・宮下 敏恵． 保育士におけるバーンアウト傾向に及ぼす要因の検討． 上越教育大学研究紀要 / 上越教育大学 編. 29 2010. 177～186
- ・森田 多美子. 植村 勝彦. 保育所に勤務する保育士のバーンアウトに影響を及ぼす要因の検討. 愛知淑徳大学論集. 心理学部篇 / 愛知淑徳大学心理学部論集編集委員会 編. (1) 2011. 67-81